

# 平城宮出土の竹尺

## —第440次

**はじめに** 本報告では、2008年に発掘調査した平城宮東方官衙地区（平城第440次）において検出した土坑（SK19189）出土の竹尺について竹製品としての位置づけを検討した。この土坑は多量の有機質遺物を含んでいたため、埋土を持ち帰り、土壤水洗をおこなっている。水洗作業は現在も継続しており、これまでに770年代前半頃に廃棄された衛府に関わる木簡や木製品が多数出土している（『紀要2009』）。今回、新たに洗浄が完了した資料の中に竹尺を見いだした。これまで平城宮・京における竹材利用についての考察をおこなってきたが（『紀要2018』）、今回報告する竹尺は、平城宮における竹材利用をより具体的に示す好例といえる。

**資料の概要** 新たに見出した竹尺は、断片が9片あり、これらは土坑内の1mメッシュの同一グリッド内から出土しているため（図246）、同時に廃棄されたと考えられる。また、9片は同一個体の可能性があるが、互いに接合しないものが多く、7片は両端を欠失し、2片に一端面が残る。9片のうち8片を図示した（図248-1）。表面に1寸、5分、1分の目盛（刻線）を刻み、線刻には墨をいれている。11寸分の目盛が確認できるため、1尺の物差とすれば2本分であるが、正倉院収蔵の木尺や平城宮・京内出土の遺物を参考に1.5尺の物差として断片を配置した。1寸の刻線は全幅を横断し、さらに上から墨線で強調される。うち1カ所に矢印状の墨線が認められる。正倉院の木尺や出土物差には5寸をあらわす目盛に文様や「○」や「×」等の印がつけられているものがある。そのため、墨線の矢印は5寸をあらわす目盛と判断

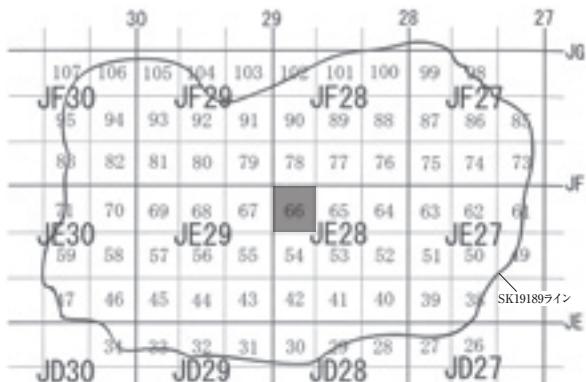


図246 SK19189の1mメッシュと竹尺出土地点（網かけ）

した。測定可能な箇所で目盛をはかると、分では0.215～0.373cmでばらつきがあり、寸では2.884～3.071cm（平均3.007cm）のばらつきがある。なお、本断片には節はなく、断面に年輪は認められない（図247）。残存長3.4～13.7cm、幅1.7～1.8cm、厚さ0.2cm。背面には墨痕が確認できる。

**資料の位置づけ** 今回報告したもの（図248-1）は分割みの目盛にばらつきがあるものの、出土品の中では精度が高いといえる。出土品の物差には完形の物がほとんどなく、その全長がわかる資料はない。正倉院に収蔵されている物差を参考にすると、長さ1尺のものが多く、象牙や犀角製である。それらは撥鏤で画文が施され、分割みの目盛がないことから装飾尺とされる。図248-2は木製で、分割みの目盛を持つことから実用尺であったと考えられる<sup>1)</sup>。図248-1は、平城宮の東方官衙地区という役所跡から出土していることもあり、実用品として用いられたと考えてよいだろう。

平城宮の物差には、平城宮南面外濠SD1250（第133次）や第一次大極殿院の西側を南北に流れる排水路SD3825（第315次）出土品、平城京では左京九条三坊十坪の井戸SE3615（第166次）出土品等があるが（図248-3～5）、材種はヒノキやウツギ等の木製であり、竹製と認定したのは今回が初めてである。竹製品は土中で遺存しにくいためか、物差に限らず出土例は極めて少ない。実用の道具として、平城宮内で竹製品を利用していたことを示す貴重な事例である。

（浦 蓉子）

### 註

1) 榎本杜人「奈良時代の尺度について」『MUSEUM』99・100、1959。

### 挿図出典

図248-1：筆者作成。

図248-2・3：『木器集成図録 近畿古代篇』、4『平城京左京九条三坊十坪発掘調査報告』、5『紀要2001』よりトレース。

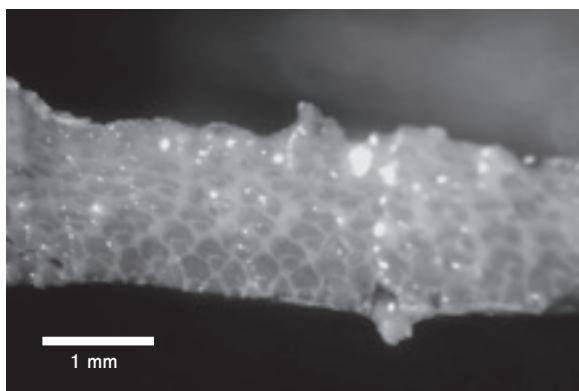


図247 竹尺の横断面（実体顕微鏡写真）

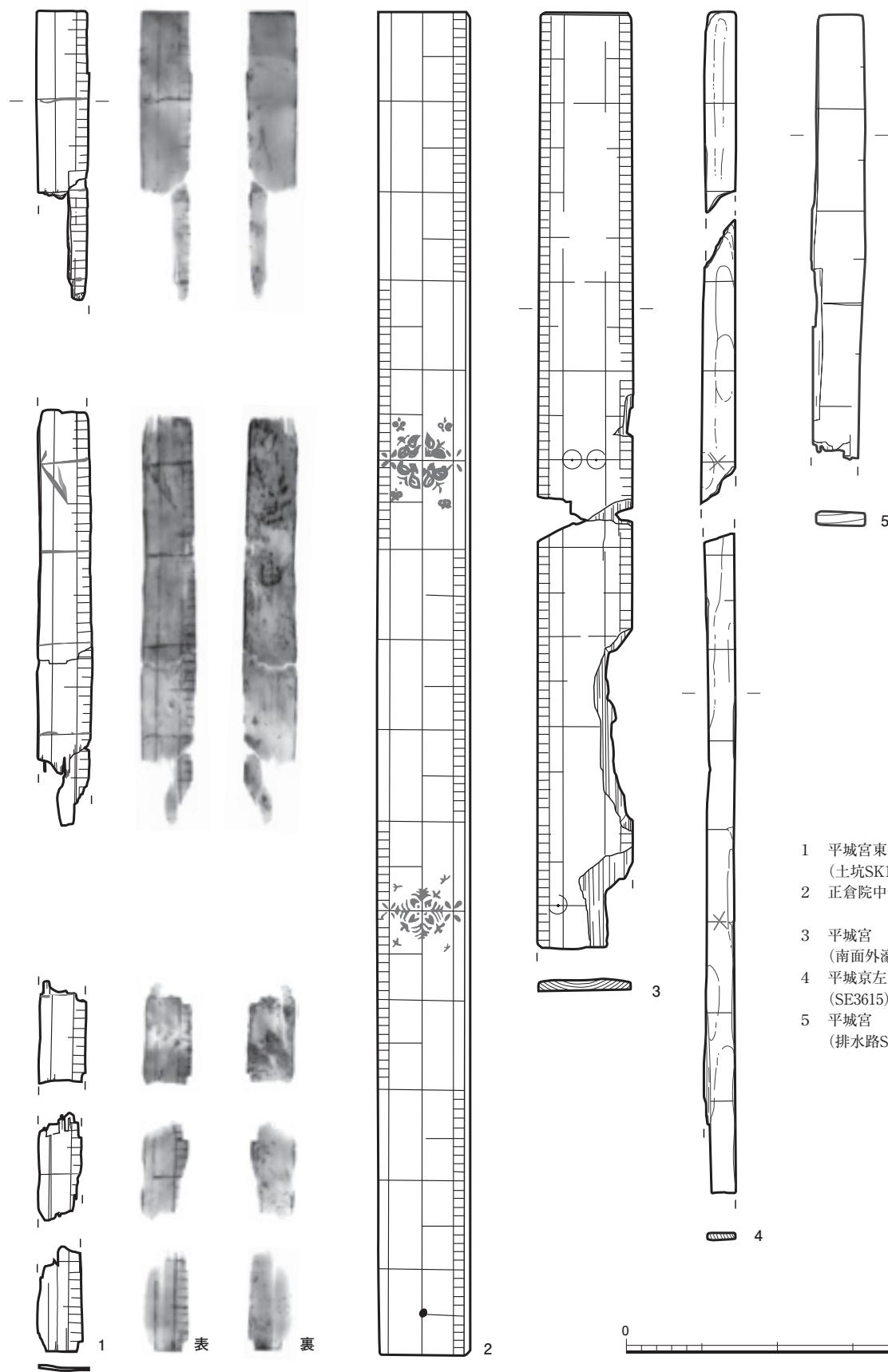


図248 平城宮出土の竹尺と奈良時代の物差 1:2